



**みんなく学術フォーラム
物語から現代世界を解き明かす**

平成14年2月7日(木)
MIDシアター

主 催

文部科学省大学共同利用機関
国立民族学博物館
産経新聞社/関西2100委員会

プログラム

司会進行
藤井龍彦教授

13:05～13:25 挨拶
講演「ガリバー旅行記をめぐって」
石毛直道館長

13:25～14:00 講演①
「ある小さな歴史の物語
— 琉球人踊りの由緒と現在 —」
笹原亮二助教授

14:00～14:35 講演②
「世界都市・故郷・異郷^{ホーム}—バーネットの描いた世界」
森 明子助教授

14:35～14:50 休憩

14:50～15:25 講演③
「中東イメージの原点としてのアラビアンナイト」
西尾哲夫助教授

15:25～16:00 講演④
「『脱近代』をめざした運動
— 出口王仁三郎の『霊界物語』 —」
廣瀬浩二郎助手

16:00～16:20 質問タイム

ガリバー旅行記をめぐって

石毛 直道

すぐれた物語は、ひとつの世界を構成しています。読者は、その世界にひきずりこまれ、あたかも自分が物語の主人公になったかのように、物語に描かれた世界へ反応します。

文字の出現以前から、物語りは口伝えに伝承されてきました。物語をつくることは、人間の本源的な活動のひとつなのです。そこで、物語を対象として、文化や社会を分析することもできます。

結論を重視する自然科学とちがって、民族学（文化人類学）などの社会・人文科学は結論にいたる過程での解釈を重視する記述的な学問です。おなじように、物語から結末だけを取り出しても意味はありません。物語は展開してゆく筋道を楽しむものです。

こうしてみると、物語の世界は民族学の研究に共通する側面をもっています。そこで、語られた世界のなかから現代を読みとろうと試みるのが今回の「みんなく学術フォーラム」です。

古典的な民族学では、研究は民族誌の作成からはじまります。文字記録にとぼしい社会にはいりこんでフィールドワークをおこなう人類学者は、まず対象とする社会の記述をおこないます。その社会の歴史、経済、言語、社会組織、風俗習慣などを記録するのが民族誌です。民族誌を基礎として、民族学の研究がなされるのです。

1726年にロンドンで刊行されたレミュエル・ガリバー著（ジョナサン・スウィフトのペンネーム）『世界の僻地にある国々への旅』は架空の民族誌です。『ガリバー旅行記』として知られるこの書物は、小人国や巨人国の部分だけを子供むけに翻案した

ものが有名となり、児童文学であると考えられがちです。しかし、原作は当時のイギリスやヨーロッパの社会を批判した、毒のある風刺文学なのです。

ガリバーは、小人国、巨人国のほかに、理性と道徳性をそなえた馬が主人公で、人間は獣性をもつ下等な動物として、人間が馬の家畜になっているスウィヌム国などに旅行します。日本も訪問し、踏み絵の風習について記録しています。

訪問したとされる実在しない国々のそれぞれについて、言語、宗教、政治形態、風習の民族誌的にくわしい描写をしたのが『ガリバー旅行記』です。そして、現代人類学の主流である文化相対主義の立場にもとづく記述をしているのです。ガリバーは物語の国における、すぐれた民族学者なのです。

ある小さな歴史の物語 — 琉球人踊りの由緒と現代 —

笹原 亮二

九州南部では、琉球人踊りと呼ばれる民俗芸能が各地で行われている。地元では「ズクジン踊り」あるいは「ジキジン踊り」と訛って呼ばれることが多い。唐人踊り・ヤンセ踊りなどと呼ばれる踊りも同系統の踊りとされる。これらの踊りは、地元の人々が「琉球人」、すなわち沖縄の人々の踊りと伝えられる踊りを踊るもので、種子島から鹿児島県、宮崎県の南部にかけて二十カ所以上に分布している。上演される期日は特に決まっていなくて、かつては何か祝い事があると、それに因んで不定期に演じられてきた。踊りの内容や演奏、装束は前述のように、いずれも沖縄の歌舞を習った、あるいは真似たとされている。しかし、実態は何となく異国風を感じさせるものの、沖縄の歌舞や装束を正確に模したものではない。踊り歌の歌詞は沖縄の歌曲を部分的に取り入れたものも見られるが、ほとんどは日本語で歌われる。伴奏に沖縄の三線ではなく日本の三味線が使われる場合もある。琉球人踊りは、日本風でもなければ沖縄風でもないという、一風変わった芸態を有する民俗芸能といえる。

琉球人踊りの分布は旧島津藩領に限られるが、島津家と琉球の関係に因んだ由来譚が語られているところはいくつか見られる。しかし、それらの由来譚は必ずしも同じ内容ではない。例えば錦江湾の奥に位置する隼人町川尻では、暴風雨に見舞われてこの地に漂着した琉球からの使節を、当時その地に隠居していた島津藩の殿様が地元の人々とともに救助し、手厚くもてなした。それに対する返礼として琉球の歌舞を伝授されて始まったと

される。由来譚は友好的なものだけではない。薩摩半島南端の山川町利永では、琉球を征伐した島津の殿様に対し、琉球の使節がご機嫌伺いに来るようになり、その際に琉球の使節が踊って見せた歌舞を真似て始まったという、少々物騒な話が伝わっている。

こうした琉球踊りの由来譚からは、具体的な内容の相違の一方で、薩摩藩と琉球王国の江戸期の密接な関係という歴史的事実を背景にしているものの、それが必ずしも正確に反映されているわけではないという共通した在り方が見て取れる。こうした異同に注目しながら琉球踊りの由来譚を改めて見直すと、それらを単にかつての薩摩藩領の人々の誤解や偏見と断じるだけではなく、我々の他者や異文化や歴史に対する共通理解を形成する際のあるパターンを読み取ることができる。例えばそれは、このような場合我々は、往々にして対象を物語という形式を採って認識し、共通理解を形成する傾向があるということである。



琉球人踊り(隼人町川尻)



琉球人踊り(山川町利永)



琉球人踊りの分布
(唐人踊り・ヤンセ踊り等を含む)

森 明子

1.三つの物語

『小公子』 1886

セドリック：金髪でバラ色の頬。セドリックスタイル（ピロードスーツにレース襟）。

父：ハンサムで情熱的なイギリス伯爵の三男。ニューヨークで病死。

母：美しく優しいアメリカ女性。

老伯爵：頑固なアメリカ嫌い。

ディック：ニューヨーク下町の靴磨き少年。セドリックの親友。

ホップス氏：ニューヨークの貴族嫌いの乾物屋。セドリックの親友。

- セドリックは伯爵の跡継ぎとしてイギリスの館に呼ばれ、その愛らしさで老伯爵の心を開く。エロル婦人も伯爵家でともに住むことになる。ディックとホップス氏の協力。

『セーラ・クルー』 1888→『小公女』 1905

セーラ：ときに攻撃的で強烈な個性の私塾寄宿生。父はインドで病死。

アーメンガード：勉強嫌いの学者の娘。私塾寄宿生。

ベッキー：私塾の下働きの少女。

ロッチェ：幼稚な私塾寄宿生。

ミンチン女史：フランス語のできないロンドンの私塾経営者。

パン屋のおかみさん：人のよいロンドン住民。

ラム=ダス：隣の紳士のインド人使用人。

- ロンドンの私塾で特待生だったセーラは、父が急死すると、下働きとしてこき使われるが、気位は失わない。やがて莫大な父の遺産を受け取り、金持ちになって私塾をさる。

『秘密の花園』 1911

メアリー：インド生まれの「みっともない」子供。両親はインドでコレラのため死。

コリン：ヨークシャーの領主館の、病気で癩癩持ちの子供。

ベン：ヨークシャー人の庭師。

マーサ：ヨークシャー人の女中。

ディコン：動物と話ができる自然児。女中マーサの弟。

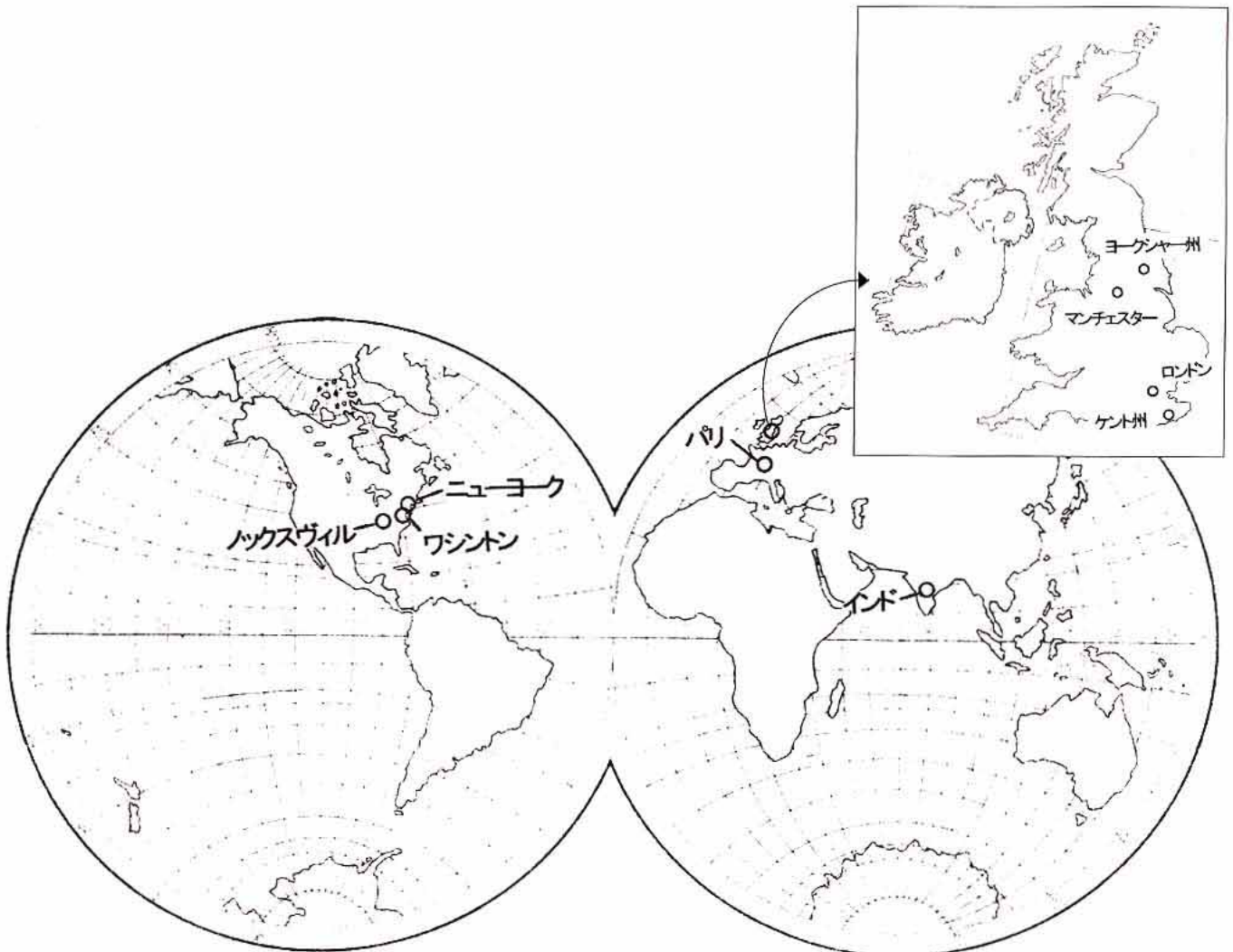
- ヨークシャーの荒野にある領主館を舞台に、ふたりのつむじ曲がりの子供が、庭造りをとおして、健康を回復し、成長していく。

2.物語にみえかくれする世界

- ・世界帝国と、世界都市
国家の境界をこえる人間の移動（イギリス、アメリカ、インド）。
帝国都市ロンドンの住民。外国人。
植民地の士官。鉱山発掘者。現地使用人。
- ・階級
貴族。領地の村人。市民（商人、弁護士）。使用人。裏町の住人。ニューヨークの住民。
- ・富
金持ち。貧乏人。乞食。
- ・健康/病気。自然の治癒力
熱病。コレラ。夜のように暗い見知らぬ町。荒野。花園。ガーデニング。
- ・家族
外国で働く父親 — 国境を越える家族。両親を亡くした子供。そのゆくえは？

英米ベストセラー

- 1884 スピリ『ハイジ』。スティヴンソン『宝島』
1885 スティヴンソン『童心詩集』。トウェイン『ハuckleberry=フィン』
1886 バーネット『小公子』、ハガード『ソロモン王の洞窟』、トルストイ『戦争と平和』



3.年譜

フランシス・ホジソン・バーネット
Frances Hodgson Burnett

- 1849 マンチェスター郊外に生。
- 1853 父の死(当時4歳)。
- 1854 マンチェスター界隈、引越。
- 1855 マンチェスター界隈、引越。
- 1865 アメリカ、テネシー州に一家移住。
- 1866 テネシー州ノックスヴィルに引越。
- 1868 ノックスヴィルで引越。
処女作発表。
- 1870 母の死(当時20歳)。
- 1872 ニューヨークに引越。
15ヶ月英国へ
- 1873 結婚(テネシー州ノックスヴィル)。
- 1874 長男誕生。
雑誌社と契約、一家パリへ。
- 1876 パリで次男誕生。
- 1877 ワシントンに引越。夫は眼科専門医。
(4年間に3回引っ越し)。
- 1886 『小公子』出版。ベストセラー。
- 1887 『セーラ・クルー』発表。
イングランドに住宅。
- 1888 『小公子』英米で上演。
- 1889 ワシントンに邸宅購入(部屋数22)。
長男発病、ともに旅行。
- 1890 長男の死(パリ)。以後慈善事業。
- 1898 離婚。
メイサム・ホールを借りる(-1907)。
- 1900 再婚(新聞種)。
- 1902 『小公女』劇上演。結婚生活破局。
- 1905 『小公女』出版。
アメリカ市民権取得。
- 1909 ニューヨークに引越。庭づくり。
- 1911 『秘密の花園』出版。
- 1914 住まいをアメリカに定める。
- 1924 ニューヨークの家で没。

～世界の動き：主にイギリス～

- [英](1770年代半ば産業革命期)
- 1795 [英] 救貧法
- [仏](1810年代後半産業革命期)
- [独](1830年代半ば産業革命期)
- 1830 マンチェスター/リバプール 鉄道開通
- 1832 [独] ゲーテ死(1749-)
- 1833 英帝国内奴隷廃止
- 1837-1901 [英] ヴィクトリア女王治世
- 1838-1848 [英] チャーティスト運動
- 1847 [英] 十時間労働法
- 1848 マルクス「共産党宣言」。
[仏] パリ2月革命、
[襖] ウイーン3月革命、
[独] ベルリン3月革命
- 1850 [英] ワーズワース死(1770-)
- 1851 ロンドン世界博覧会
- 1857 経済恐慌西欧各国にひろまる
- 1858 [英] インド直接統治
- 1859 ダーウィン「種の起源」
- 1861-65 [米] 南北戦争
- 1862-90 [独] ビスマルク執政
- 1863 ロンドン地下鉄開通
- 1866 普襖戦争(→プロシア)
- 1867 マルクス「資本論」第一巻
- 1870 普仏戦争(アルザス・ロレーヌ→プロシア)
- 1871 ドイツ帝国(ドイツ統一)
イギリス労働組合法制定
- 1887 [英] 炭坑法(少年労働禁止)

- 1894 [英] 八時間労働法声明
- 1901 英領オーストラリア連邦成立
- 1902 日英同盟

- 1907 英領ニューージーランド連邦成立
- 1910 英領南アフリカ連邦成立

- 1914-18 第一次世界大戦

中東イメージの原点としてのアラビアンナイト

西尾 哲夫

日本にとって今日ほど、イスラム文明との対話が焦眉の課題となっている時代はない。一般的日本人のイスラム文明理解に限界があったことは否めない。イスラム世界との歴史的交渉がなかったことが主要因であるが、従来の研究テーマにも偏りが見られ、イスラム世界における民衆文化の研究は殆どなされてこなかった。しかるに、日本人のイスラム世界観を決定づけたものが、民衆文化の精華とも言えるアラビアンナイトであったことは、明白な事実である。アラビアンナイトがヨーロッパに紹介されてから、2004年でちょうど三百年になる。これを記念して、国立民族学博物館では2004年に特別展「アラビアンナイトの世界（仮題）」を企画している。

文明間の対話という現代的視点からながめれば、アラビアンナイトの「発見」はアメリカ大陸の「発見」をはるかにしのぐものであった。アラビアンナイトこそは、西欧のイスラム世界観を決定づけるキーワードなのである。ヨーロッパ世界はアラビアンナイトの彼方にどのような中東イスラム世界を見ようとしたのか。ヨーロッパ文化に受容されたアラビアンナイトはいかなる変貌をとげたのか。日本がアラビアンナイトの彼方に見たものは、実は鏡にうつった西洋近代の幻だった。こうして培われたイスラム世界観が、日本におけるイスラムイメージの土壌となって、ゆがんだイスラム世界像を養ってきたのである。中東イスラム世界におけるアラビアンナイトの形成と、欧米そして日本への受容と変容に焦点をあて、特に欧米・日本における中東イスラム世界への一般的イメージが形成される過程で、アラビアンナイトが果たしてきた役割を明らかにしたい。

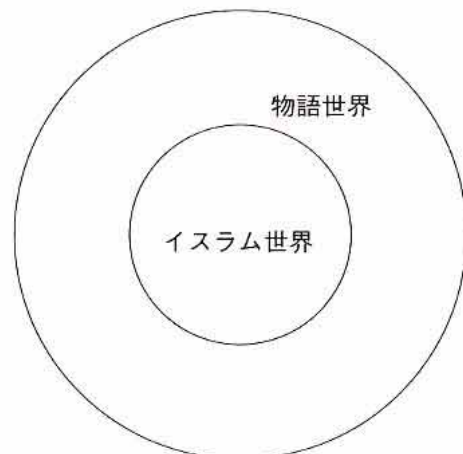


アル=イドリースィーの世界地図

(南が上方、上下逆転して見ると現代の世界地図との対応関係が解りやすい)

- 1: ワークワーク al-Wāqwāq 2: スファーラ Sufāla (モザンビーク) 3: ザンジュ al-Zanj (黒人国) 4: バルバラ Barbara (ベルベラ) 5: ナイルの源流: 月の山 Jabal al-Qamar 6: クムル al-Qumr (マダガスカル) 7: サラディープ Sarandīb (セイロン) 8: スィーン al-Sīn (中国) 9: ヒンド al-Hind (インド) 10: フラーサーン Khurāsān 11: キルマーン Kirmān 12: イラーク al-'Irāq 13: ヤマン al-Yaman (イエメン) 14: ヒジャーズ al-Hijāz 15: シャーム al-Shām (シリア) 16: ミスル Miṣr (エジプト) 17: ハバシャ al-Habasha (アビシニア) 18: イフリーキヤ Ifriqiya 19: マグリブ al-Maghrib al-Aqṣā (モロッコ) 20: フワーリズム Khwārizm 21: ヤージュージュ Yājūj 22: マージュージュ Majūj (ともに旧約聖書やコーランに現われる伝説上の巨人族、ゴグとマゴグ) 23: ブルガール Bulghār 24: ジャルマーニヤ Jarmāniya 25: アルマーニヤ Almāniya (ゲルマニア) 26: ファランシィーヤ Faransiya (フランス) 27: バナーディカ al-Banādiqa (ヴェネツィア)

幻想世界



1.はじめに—日本と中東世界

(1) 月の砂漠／シルクロード

エスニックブームとアジアンテイスト

(2) ワクワーク／倭国

アラビアンナイトの中の日本？

2.アラビアンナイトとは？—成立の謎

(1) 名前の意味

千一夜物語／千夜一夜物語／アラビアンナイト

アルフ・ライラ・ワ・ライラ

(2) 「アラビアンナイト」の再発見

アントワーヌ・ガランの翻訳（1704～17）とガラン写本の謎

デルプロ／ガラン編『Bibliothèque Orientale』 イスラム文明の宝庫

アラジン・アリババ・シンドバッドの由来 ファンタジーの登場

カルカッタ第二版（1839～42）印刷の意味 知的支配の象徴

児童文学と好色文学 スコット／レイン／バートン／マルドリユスの翻訳

リンカーンの愛読書『Oriental Moralists』

他者と自我をめぐる物語空間（＝ヴァーチャル世界）の登場

日本への紹介 明治8年（1875）『開巻驚奇暴夜物語』永峰秀樹訳

3.イメージの残像と再生産—砂漠の盗賊からテロリストへ

(1) アラブ都市文化のなかのベドウィン観

砂漠の民へのノスタルジアと恐怖

アラビアンナイトのなかのベドウィン 純朴（愚鈍・粗野）／盗賊

(2) 西洋でのイメージの変容

粗野で野蛮で血に飢えた砂漠の民 ヘロドトスと聖書

アラブ／サラセン／ムーア／マムルーク

ロマンティックな存在・高貴なる野蛮人 啓蒙化

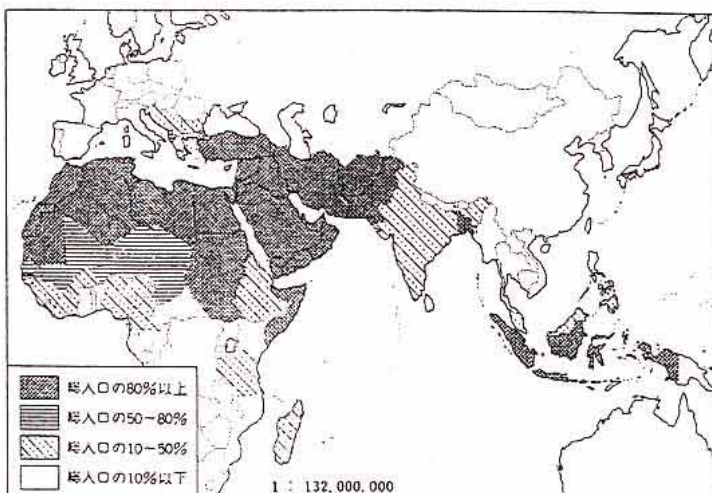
アラビアのロレンス 賢明なイギリス人の友人として操作可能な存在

(3) 現代文明における物語（ファンタジー）の役割

共同体の物語（民話・神話）から自己形成（他者理解）の物語へ

教養としての異文化情報の共有と文化的安全保障

グリム童話とアラビアンナイトの運命



現在のイスラム教徒の国別分布

紀元前18世紀-16世紀頃	ウェストカー・バピルス
紀元前5世紀	『ジャータカ』の現存最古の版
紀元後250年頃	僧会『旧雑譬喩経』
630	預言者ムハマンドがメッカを征服
632	ムハマンド没
630年代、640年代	ビザンツ帝国軍及びサーサーン朝ペルシア軍敗北、アラブがその領土を征服
661	ウマイヤ朝創設
710	イスラム教徒のスペイン侵入
711	イスラム教徒トランスオキシアナと北インドを占領
750	アッバース朝創設
750頃	『カリラとディムナ』ペルシア語よりアラビア語に翻訳
762-6	バグダッドが築かれアッバース朝の首都となる
800頃	『シンティパス』物語群の編集
800-900頃	『キターブ・ハディース・アルフ・ライラ』編集
831	詩人アスマイー没
836	サーマッラーが築かれ一時期アッバース朝の首都となる
850頃?	アラビアン・ナイトの現存最古の断片作成
869	随筆家ジャーヒズ没
910	北アフリカでファーティマ朝創設
942	アラビアン・ナイトの競合物語集（現存せず）の編集者ジャフシャーリー没
956	歴史家にして博物学者のマスウーディー没
969	ファーティマ朝によるエジプト占領およびカイロ建設。『ラサーイル・イフワーン・アッサファー（純正同盟団の書簡集）』作成
987	イブン・アンナディーム『アルフィフリスト（書籍目録）』編集
994	物語集『アルファラジュ・バアダ・アッシッダ』の編集者タヌーヒー没
1085	ソーマデーヴァ『カタール・サリット・サーガラ』
12世紀初期	英雄叙事詩『アンタラ物語』編集
1110	『ディスクブリーナ・クレリカーリス』の編集者ベトルス・アルフォンシ没
1122	ハリーリ没
1143	コーランのラテン語訳なる
1171	サラディンがエジプトのファーティマ朝を滅ぼし、アイユーブ朝を創始
1200	イブン・アルジャウジー没
13世紀初期	いかさま手口の暴露本、ジャウバリーの『カシュフ・アルアスラール』作成
1250-60	エジプトとシリアにおけるアイユーブ朝宗主権失墜し、マムルークのスルタン国が成立
1252-84	アルフォンソ賢王カスティリヤを統治
1253	性風俗作家タイファーシー没。『シンティパス物語』のスペイン語訳成立
1258	モンゴル軍バグダッド来襲。バグダッドのアッバース朝最後のカリフ処刑
1260-77	マムルーク朝スルタン・アッザーヒル・バイバルスがエジプトとシリアを統治
1311	影絵劇作家イブン・ダーニヤール没
1330	ナフシャビー『トゥーティーナーメ』
1353	ボッカチオ『デカメロン』
1367	スーフィー物語集の編集者ヤーフィイー没
1384	ドン・ファン・マヌエル親王没
1387	チョーサーが『カンタベリー物語』に着手
1410頃	性風俗作家ナフザーウィーが活躍
1412	純文学物語集『マターリウ・アルブドゥール』の編集者グズーリー没
1424	セルカンビ没
1486	悪名高きエジプトの犯罪者アフマド・アッダナフ処刑さる
1516	オスマン・トルコがマムルーク朝シリアを占領。アリオスト『狂えるオランダー』出版
1517	オスマン・トルコがマムルーク朝エジプトを占領。最後のマムルーク・スルタン、トゥーマーン・バイが処刑される
1549-59	ナヴァールのマルグリット『エブタメロン』を編集
1634-6	バジール『ペンタメローネ』
1646	アントワーヌ・ガラン生まれる
1697	『ビブリオテーク・オリエンタル』がデルブロの死後、ガランによって出版される。ペロー『マザーグースの話』出版
1704	ガラン『千一夜』の翻訳開始（最終巻は1717年）

1708	この年、ガランの英語訳が初めてチャップ・ブックとなって出版されたと思われる
1715	ガラン没
1721	モンテスキュー『ベルシア人の手紙』
1742	小クレビヨン『ソファ』。カゾット『千一無駄話』
1748	ディドロ『不謹慎な宝石』。ヴォルテール『ザディグ』
1759	ジョンソン『ラセラス』
1761	ホークスワース『アルモランとハメット』
1764	リドレー『ジニーの話』
1765	ウォルポール『オトランド城』
1767	シェリダン『ヌールジャハッド』
1772	カゾット『恋する悪魔』
1776	リチャードソン『アラビア語文法』
1786	ベックフォード『ヴァテク』の英語版
1792	カゾット、ギロチンにて死刑
1794	アレグザンダー・ラッセル『アレッポ博物誌』
1795	パリに現代東洋語学院創設
1796	東洋学者サー・ウィリアムス・ジョーンズ没、M・G・ルイス『マンク』
1798-1801	フランス、エジプトを占領
1799	フォン・ハンマー・ブルクシュタール、イスタンブールにて勤務
1801	サウジー『サラバー』
1804	マライア・エッジワース『不運なるムラード』
1804-5	ポトツキ『サラゴサ手稿』第一部
1810	シルヴェストル・ド・サシー『アラビア語文法』。サウジー『ケハマの呪い』
1811	ジョナサン・スコットのアラビアン・ナイト訳
1812-22	グリム兄弟『童話集』
1812-32	バイロン『ジャウアー』
1813	グリム兄弟『童話集』を出版
1814-18	カルカッタ第一版アラビアン・ナイト
1815	ポトツキ自殺
1817	ムア『ララー・ルーフ』
1820	マテュリン『放浪者メルモス』
1824-43	プレスラウ版アラビアン・ナイト
1825	ジャバルティー没。ハビヒトがアラビアンナイトの発刊を開始。 フォン・ハンマー・ブルクシュタールのアラビアン・ナイト・ドイツ語版出版
1832	ワシントン・アーヴィング『アルハンブラ物語』
1835	ブーラーウ版アラビアン・ナイト
1836	レイン『現代エジプト人の風俗習慣』
1837	ヴァイル、アラビアン・ナイトの翻訳に着手
1838	トレンズ訳アラビアン・ナイト
1838-41	レイン訳アラビアン・ナイト
1839-42	カルカッタ第二版アラビアン・ナイト
1840	ポー『グロテスクとアラベスクの物語』
1844	キングレイ『東方より』
1851	ネルヴァル『東方紀行』。メルヴィル『白鯨』
1855	メレディス『シャグバットの毛剃り』
1863-93	レイン『アラビア語-英語大辞典』
1882	スティーヴンソン『新アラビア夜話』
1882-4	ペイン訳アラビアン・ナイト
1885-8	バートン訳アラビアン・ナイト
1899-1904	マルドリユス訳アラビアン・ナイト
1911	アールネ『民話の話型索引』
1921-8	リットマンのアラビアン・ナイト・ドイツ語訳
1928	ウラジーミル・プロップ『昔話の形態学』
1943	D・B・マクドナルド没
1974	ジョン・バース『キマイラ』
1978	アルバート・B・ロード『話の歌い手』
1984	マフディー版『アルフ・ライラ・ワ・ライラ』

『脱近代』をめざした運動 — 出口王仁三郎の『霊界物語』 —

廣瀬 浩二郎

日本宗教文化史の一研究者である私は、かねてより種々の新宗教教団の「大本」としての意義を持つ出口王仁三郎（1871～1948）の思想と行動に注目しているが、「大化物」とも称されるようにその人物像はつかみにくい部分が多い。今回は王仁三郎の重視した芸術・武道・農業・エスペラント語などに即して彼の掲げた地上天国一みろくの世という観念の一端を紹介し、その現代的意味について考えてみたい。

1997年の夏、東京都美術館で開催された「エイブル・アート97東京展—魂の対話」という展覧会は、障害者の芸術作品をメイン・テーマとし、美術館のバリア・フリー化を実現したイベントとして各方面から絶賛された。その展示の一つの柱になっていたのが、みずのき寮生の知的障害者が描いた絵画作品だった。

みずのき寮は大本社会事業団（信光会）の一施設として、1959年、亀岡市に設立された。開寮当時から知的障害者と地域住民との間に垣根を設けない「苑」の思想、「人は神の子、神の宮」という人類愛善主義に基づき、全国でも先駆的な事業に取り組んだ。1964年からは王仁三郎の「芸術は宗教の母なり」とする芸術観に立脚して、知的障害者のための絵画教室が施設内で開かれるようになった。試行錯誤の30余年を経た現在、みずのき寮生の絵画作品は日本のアウトサイダー・アートとして国際的に評価され、各種のコンクールに入選する者も相次いでいる。

王仁三郎自身も優れた芸術家として書画・陶芸など、たくさんの生命力あふれる作品を残しているが、その天衣無縫な作風は神・自然に通じるものだった。人間の無意識の領域は無限の可能性を持つといわれるが、現在の意識レベルで知的「障害者」とされている人々の無意識に潜む未知なる

パワーは、やはり神・自然につながるものであり、それは近代的知の体系では計り知れない凄みを内包している。知的障害者の持つ豊かな創造力と新鮮で素朴な「魂の芸術」は、我々の近代的な常識に強烈なインパクトを与えてくれる。

さて、ここ数年私は合気道の稽古に励んでいるが、合気道の創始者・植芝盛平（1883～1969）が王仁三郎から大きな影響を受けている事実は、一般にはあまり知られていない。植芝は「合気は愛気である」ということを強調し、大宇宙（天地・自然）と小宇宙（人体）との和合を重視する絶対不敗の新しい徒手武道を提唱した。もともと、神道の儀礼・思想と古武道とは深い関係を持つが、とくに植芝の合気道は言霊思想・鎮魂帰神法・霊主体従・神人合一観念など、大本霊学に多く依拠していた。

私はいつも合気道に親しみながら、近代スポーツのより強く、より速く、より遠くへという筋肉運動とは異なり、ゆっくりと柔らかく自然の呼吸に合わせ体を動かす心身一如の技法・術理—「魂の技」に魅了されている。王仁三郎は戦前に植芝を会長として大日本武道宣揚会を組織し、神による真の武の道の普及に努力した。その根本理念は、他の近代武道と違い合気道が試合・競技をしないことに象徴されるように、「戦わずして勝つ」—万有愛護の精神を具現するための心の立替え立直しだった。

みずのき寮生の「魂の芸術」にしても合気道の「魂の技」にしても、王仁三郎の死後にその思想が開花・発展した例だが、近代批判・人間開放論という点で共通している。私が王仁三郎の世界観・人間観を心身にしみこんだ近代的常識の打破という観点で理解するようになったきっかけは、彼の名著『霊界物語』との出会いだった。近代的理性

や分析概念では解釈しきれない『霊界物語』も、近代人が落ち込んだ断定的・閉鎖的なものの考え方―「われよし」・「つよいものがち」の発想を崩していくことにより読解できる。私も全81巻という長大な物語を何度か読み返すうちに、王仁三郎が何を語ろうとしていたのかが漠然とながらわかってきたような気がしている。

今後とも「研究」・「宗教」という枠にこだわらずに、いかにして王仁三郎の「魂」を応用・紹介

していけるのか、あるいは彼の主張した脱近代への救済論を21世紀にどう活かしていくべきなのか考えていきたい。最後に『霊界物語』の中で私の好きな歌を一つ挙げよう。「耳で見て目で聞き鼻で物食うて 口で嗅がねば神はわからず」―近代的常識に縛られることなく、私も自己解体・自己錬磨を繰り返しながら「魂の芸術」・「魂の技」を創造したいものである。

出口王仁三郎の和歌（『霊界物語』などから）

「生活におびやかされてやむを得ず 昼夜分かたず働きしわれ」
「このままに老い朽ちてゆく身なるかと 悲憤の涙しぼりし若き日」
「教育や政治芸術一切を 指導するこそ真の宗教」
「スサノオの神の踏みし足跡を たどりて世人を治め行くかな」
「非常時に直面したるわが国の 前途を救う力は神なり」
「農民の窮状ただちに救わずば 日本はゆゆしき大事とならん」
「地の上にあまたの国はありながら 信ずる神は一つなりけり」
「新しき精神文明鼓吹して 人類救うは日本の義務なり」
「うずもれし神霊ことごと世に上げて 御国を護る大本の道」
「幾たびも繰り返し見よ物語 神秘の鍵は隠されてあり」
「天地の神の大道に従えば 一切万事楽しみとなる」
「国々の境はあれど愛善の 真の教えは隔たりもなし」
「愛善の心世界に満ちぬれば この世はたちまち地上天国」
「国と人の境を知らず天が下に 鳴り響くなりエスペラントの声」

「魂」の芸術論

「彼らはいつも怒られ、人前に出ないように言われました。しかし、たった一枚の紙の上で、彼らは自分たちの個性や、自分がだれであるということを堂々と主張することができるのです。」

（「エイブル・アート97東京展」パンフレット [日本障害者芸術文化協会] より）

「神様がわからないという人に、一本の花を見せてやれ。これでも神様がわからないのですかと…。たれがこの美しく、妙なる色香をもった花を造るのであるか。」（出口王仁三郎『水鏡』[1928年]より）

植芝盛平の“合気道道歌”

「合気にてよろず力を働かし 美しき世と安く和すべし」
「合気とは愛の力の元にして 愛はますます栄え行くべし」
「合気とは説けばむつかし道なれど ありのままなる天の巡りよ」
「大宇宙合気の道は諸人の 光となりて世をば開かん」
「惟神合気かんながらの技をきわむれば いかなる敵も襲う術なし」